

美術手帖, n. 128, 6/1959, 編: 大下正男, 出版社: 美術出版社,
瀧口修造(Takiguchi Shūzō), ムナリー 創る手品師 幻想空間を – Joy-maker. Munari.



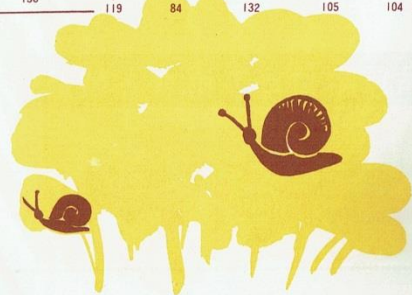


原色版	山口長男	彷徨から抽象 絵画への開眼……三宅正太郎	137
シャガール 赤の裸婦			21
ポッチチエリ 春			79
嶋本昭三 作品			127
宮城音蔵 船			109
オフセット版			
シャガール 色刷3点			43
シャガール 絵本8点			49
ムナリ クリスマス・カード			13
			65
グラフィック版			
松方コレクションを迎える			31
シャガールの銅版挿絵9点			67
ムナリの作品			105
もうひとつの顔			85
新技法読本			133
ビエンナレ出品作			105
表紙カット・シャガール			133
目次カット・ムナリ			133

—展覧会—	モダンアート展	久野 真「作品」	130
—展覧会—	春陽会展	難波田龍起「線のリズム」	130
—展覧会—	国画会展		130

■「どんじですか」			119
-----------	--	--	-----

第5回 サンパウロ ビエンナレ出品作	和伊都夫	132
もひとつの顔	山口勝弘	105
（グラフィック）		
風俗史	長谷川路可	84
講義	大工 風間 完	84
宣言	山崎 隆夫	84
マン	曲水 中 倉田 三郎	84



新技法	破る		
読本	(グラフィック)		
	写真	山口勝弘	
	大辻清司		
			105

手帖通信	形と心理と形の生理……山口正城	72
絵画・彫刻		
工芸	建築	89
デザイン	漫画	89
海外短信	写真	101
	展覧会だより	104
	書架	147
	ディテール・クイズ	149
		116
		82

■名画誕生	春（プリマヴェーラ）	ポッチチエリ	78
物描	南大路		131
人点	上村 松篁		118

CHAGALL その生涯	窪田 般彌	23
特異な主題	あふれる民衆感情	30
対談	瀨川 軌一	40
久保貞次郎		30
色刷		
赤の裸婦		21
魁		43
狼に扮したサーカスの女		49
ダヴィデ王とその妃ベツサベ		55
オフセット版		
絵本	作品8点	13
グラフィック版		
銅版挿絵	9点	31

西洋美術館に迎えた 松方コレクション	（グラフィック）……撮影・酒井啓之	1
■ぶらり見参	西洋美術館 富永惣一……竹林 賢	5
初代館長		
JOY-MAKER ムナリ	幻想空間を創る手品師……滝口修造	61





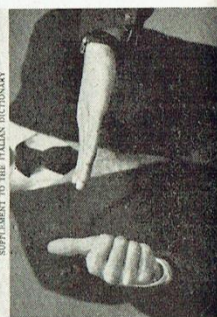
ムナリー

JOY-MAKER BRUNO
MUNARI

幻想空間を
創る手品師

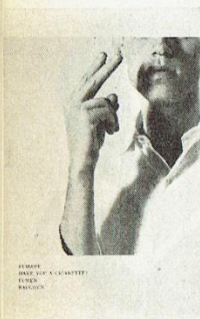
ムナリー

滝口修造



「イタリア語字典補遺」表紙

先日イタリアのトリノの消印で妙な印刷物が舞いこんできた。見ると「イタリア語字典補遺」というタイトルが独仏英語で書いてある写真版入りの小冊子(も)である。この鹿爪らしい題名にもかかわらず、これはイタリア人のジュスチニア集といったようなもので「タバコあるかい?」とか「おれは知らないよ……」とか「よし良かった」とか、中には授業中の子供が生理的要求を催したときに先生に訴える手の合図(○)などが写真で示されていて、四ヶ国語の解説と対照しながら見てゆくと思わず微笑を誘われる愉快な絵本である。これは実はトリノのカルバーノ会社の有名なヴェルモット「プリント・エ・メス」(一点半の意)のPRなので、同書によれば「イタリアで手真似で注文できる唯一の



「タバコあるかい?」

川口 同じ特異性をもった作家というものは、いつの時代でも生れなideでしょう。現代はもつとちがったものになる。かなり肉体的であったり、性的であったりする作家もあるにはあるが、シャガールののように徹底して偉大な作家というものは、一世紀に一人か二人しか生れてこないでしょう。

瀬木 二十世紀のはじめに、ひと頃亡命者がたくさん出て、芸術の分野にも亡命者たちの活躍した時代があったのですが、いままた

ああいうタイプの作家というのは、少くとも現在の芸術家のタイプではなくて、おそらく、中世紀のクラフトマンのような伝統に属している作家ではありませんか。現代の画家とはタイプが違うと思いますね。もちろんシャガールのなかに尖鋭なものを求めることはできない、しかしけつして古くもない……。

彼の芸術は、あらゆる人間の感情の根本にふれるようなノスタルジー、いいかえれば人間の根元的な感動みたいなものをとらえていると思うのです。こういう画家はあらゆる時代に一人か二人、かならず出てくるものですね。

一切のイズムや運動に自由に接触しながら、しかも無関係で、つまり、さまざまなものを吸収しながら、フリーな立場に立っている画家——それがシャガールだと思ふ。

そして、民衆と接し、民衆の生活感情を土台にして、自由な素材を選び、それを型にはまらないかなり高度な技術で描いている作家ですね。——川口さん。こういう作家がこんども出てくるのでしょうか。

芸術の中に民族的な特性を強調するようになってきていますね。

川口 そう言えるでしょうね。

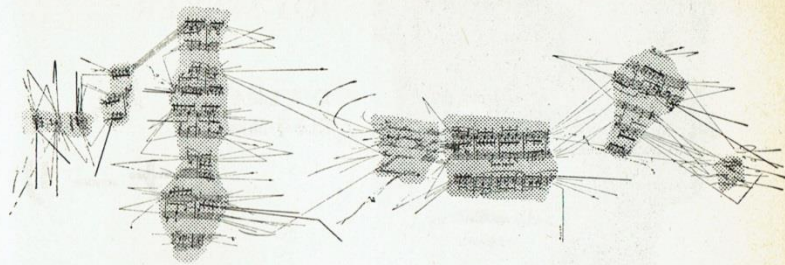
瀬木 シャガールなんか亡命したことによって自分のもっている民族的な雰囲気が出てきたわけですが、いま、新しくいわれている芸術の民族性ということから考えると、シャガールの場合はむしろ逆な出方なんです。

むかしは、たとえば、パリという国際的な広場があつて、そこへ、いろいろな民族の画家があつてきて、同化しながらいろいろな匂いを発散させた。もちろん、そういった国際的な普遍性を土台にしているわけですが、現在、われわれが民族的と考えるものは、反対に、いかにして同化を脱却して独立しようか、という努力にあらわれるわけですね。

シャガールのばあい、彼の芸術をコスモポリタンなものとわりきろうとして、なお残るものがあるので、一部の公式主義者の見方には同意できませんが、——それでも、パリへ出てこなかったら、彼はおそらく、凡庸な、あるいは風変わりな土俗芸術家として終わったかもしれない、という気がします。そこに、シャガールの特性と限界をみたい、とおもいます。

毎号作家特集を掲載しています。

一月号 バウル・クレエ 四月号 ボール・ゴラン
二月号 アンリ・ルソオ 五月号 ビエール・ボナール
三月号 アメデオ・モジリアニ (各号とも在庫小數、直接本社へ)



コラージュ・デッサン

とはゆき方がちがっている。私は昨年のヨーロッパ旅行でデザイナリーに会ったり、デザイナリーを勉強するほどの余裕はほとんどなかったが、ミラノでオリヴェッティ会社の専属デザイナリーであるビントーリを訪ねたこと、このムナリーの家を訪ねたぐらいであった。すべての仕事がいとも新鮮なオリヴェッティ調を創りだすことに捧げられている、いわばすぐれた「近代的な職人」とでもいってよいビントーリにくらべると、ムナリーは自由をたのしんでいる詩人型とでもいえるだろう。これらの活動はいろんな面に分散していて、ちょっとつかみにくい。といっても何でも屋の、ディレクタントというのとは別である。ムナリーの仕事にはかれ独特のファンタジーとユーモアがあり、時には底抜けのナンセンスを発揮する。かれのアイデアはたんに人の意表をつくというよりも、人にたのしさをあたえる人間的な暖かさがどの作品にもにじみ出ているのである。実際にその人に会ってしみじみ感じたことである。

ミラノのブルー画廊でいろいろなカタログなどを買って眺めていると「エロジオ・デ

ル・ディセグノ(デッサン礼讃)」という展示会の図録があり、ソラーリ、ロンゴニ、マッテガツツアの漫画、フォンターナの素描などにまじってムナリーのコラーージュ・デッサンが載っていたので、私ははじめてムナリーがここに住んでいたことを思いだした。ムナリーの話をすると画廊の主人がすぐ電話で訪問の打合せしてくれた。あくる日の夜八時、スカラ座の前でタクシーを拾ってヴィットリア・コロンナという通りのムナリーの住むアバルトマンへかけつける。私は自分の国でも未知の人を訪ねすることは苦手の方なので、こんなときは一大決心が要る。ましてイタリア語を話せない私が一人で乗りこむのだから無茶といえはいるが、旅行者の心安さというものでしょうか。

コンシエルジュのおばさんに話してあったと見えて「ムナリーさん」と一言いうと、ここにしてエレベーターで部屋まで案内してくれる。すぐに愛想よく迎えてくれたムナリーは小柄で気軽な人だ。アトリエとも書斎とも客間ともつかぬアト・ホームな感じの部屋。二人の青年がラジオをいじっていたが、その一人を「私の息子です」といって紹介さ

れた。ムナリー氏もいささか心配だったとみえて「英語とフランス語とどちらがいいですか、英語なら息子が通訳してくれるから」どっちでも同じことです」とそんな場合に私が決まってしまう返事は「両方とも出来る」という意味でなく、どっちも大したことはないという表情なのである。それでもムナリーは「これでひと安心!」というおどけた顔をして見せる。それに「批評家」というものはどこでも作家にはコワモテなのだが、私は好きな作家に出会った場合、そんな垣根を取り払うようにする。その誠意が通じたとみえて、すっかり打ちとけて、二人の珍妙な会話が三時間以上もつづいた。

かれはまずテーブルの上に置いてあった小さな本ぐらいの小包を見せて「これはストックホルムの近代美術館でやった私の展示会のすてです」という。なんのことかわからないので「あなたの魔術の一つですか」という私に「まあお待ちなさい」といって、小包を解くと現れたのは数十枚のスライドばかり。それも無色透明なもので、のぞいただけではなんの変哲もない。説明によると、このスライドにはセロファンやポリエチレンやマ

イカ(雲母)のような透明な材料の断片が挿入してあるという。ムナリーはやがて小型のプロジェクターでスクリーンに映写したが、そのままだではセロファンなどの形や皺が無色で映るだけである。かれはちよっと手品師のような手付きで、これも透明なプラスチックの円盤をとりだしてレンズの前にかざすと、途端にスクリーンに鮮やかなプリズムのような色彩が現われた。そしてその円盤を少しずつ回転するにつれてスクリーンの色彩が変ってゆくのである。目のさめるような色彩が部屋の白い壁の一隅に時ならぬ感動空間を現出する。やっぱこれはムナリー氏の魔術的スペクタクルのひとつであったのだ。その種明

しは、レンズの前にかざす円盤がボラロイド(人造偏光板の一種)であって、スライドにもそれが一枚重ねてあるのだという。そのわずかしい物理学的な理論は私にはわからないが、スライドにはさんであるセロファンやポリエチレンの抽象形の断片や不定形の皺がプリズムの役目をするらしい。これをムナリーは「イマーージュ・ボラリゼ(偏光映像)」といったり、「プロジェクトジョン・ディレクト」(直接映写)と呼んだりしていたが、この

「ボータブルの展示会」を先年ニューヨークの近代美術館でも催したと語っていた。私はぜひ日本でもこの「展示会」を実現したいものだと思ひ、その諒解をえた。

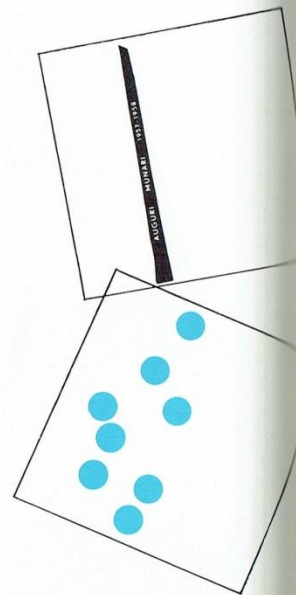
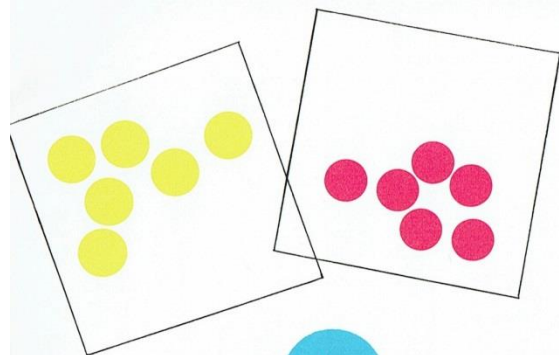
この映写が終わってから、ムナリーは魔術師のようにつぎからつぎへかれの仕事を披露しはじめた。それを一マジャナルで分類することもできるが、それらは結局ムナリーの世界に帰一してしまう。かれは決して深刻な顔をしてそれを押し売りするような態度ではない。それに接したものが、ひとりでに微笑を催すと、ムナリー氏がにっこり笑いながら姿を現わすという具合なのである。

ムナリーは商業デザイナリーとしてボスターもつくる。そのひとつに靴のボスター(ラビ



ムナリーの個人カードのカット

ムナリーのクリスマス・カード

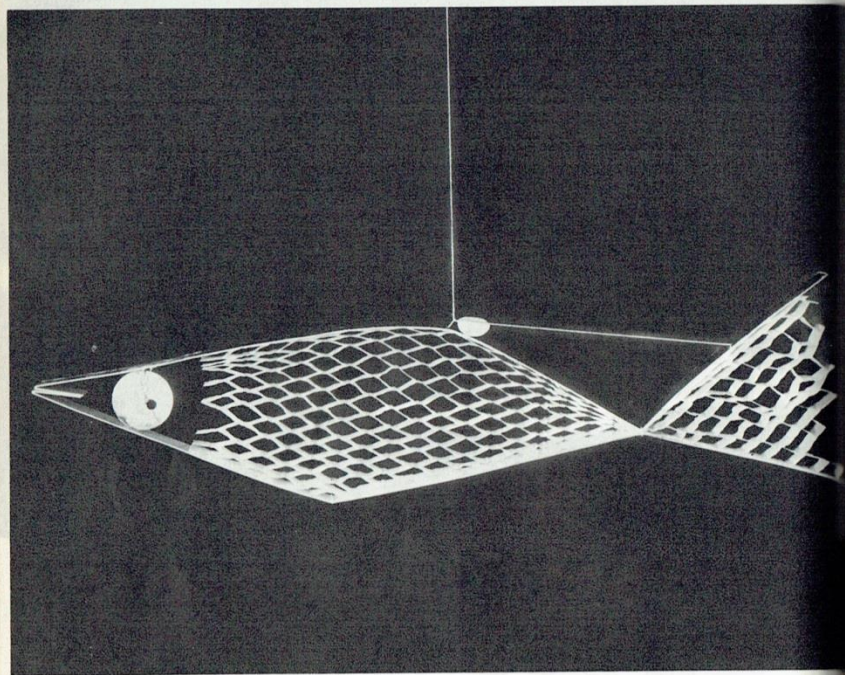


11cm正方形のセルロイド四枚に、上図のように各面赤黒青で印刷されたもので、これを重ねると下図のようになるという趣向のもの。図柄のむきと重ねる順序によって、さまざまな変化が生れる。

がある。靴の跡が二つベーズメントの上
に描かれているが、これをタテにつなぐと足
跡が無限に歩いているようになっていく。高
いビルディングの壁などに張ると足跡は地上
からどんどん登っていつて空に向って消える
ことになる。またかれのデザインした魔法瓶
やスポンジ・ゴムの猿の形などは（トラビ
ャ・インダストリアル・デザインとしてミラ
ノのラ・リナシェンテ百貨店で主催している
「コンパソ・ドーロ」黄金のコンパス）賞を
獲得している。しかしムナリーはいろんなナ
ンセンスなものをデザインする。それは玩具
ともなとも名状しがたいものである。かれ
はそうしたものに「無用の機械」などと名づ
けているが、ミラノのミラニーズ社のため
につくったという世界最大のモビールから、
紙製の魚のモビール（トラビャ）にいたるまで
ある。この軽い紙の魚は、ちょうど日本のお
祭りに売っている扇のようにひらいたり閉じ
たりできる紙のおもちゃと同じ貼り方であ
る。もっとも愉快なのはクリスマス・カードであ
ろう。もっともカードという形式からだいふ
逸脱したものではあるが、たとえば四枚の透

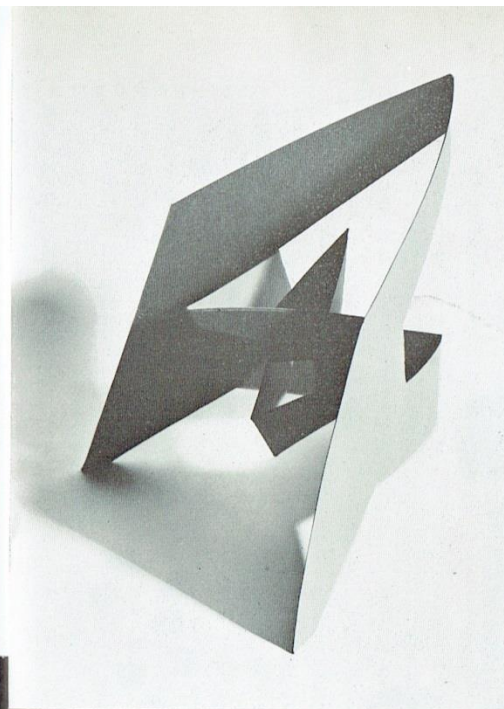
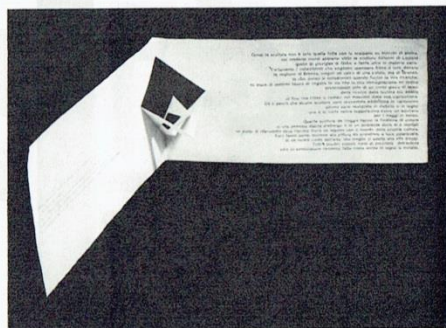
明なセルロイドにそれぞれ青赤黄黒で印刷し
たものを重ねるとクリスマス・ツリーに見え
るといった、四色版の原理を応用したような
しゃれたもの（色別、三つに折った厚紙をひ
らくと赤い糸がピンと張るようになってい
て、爪弾くとブルン、ブルンと妙音を発する
ものや真意、それから二つ折りの紙をひらく
と、折り目の部分の切り方によって立体的な
構造が飛び出す仕掛けになっている、ムナ
リーのいわゆる「携帯用彫刻」の原理を応用し
たものなど、しかもこれがみんな自家用のク
リスマス・カードなのである。
ムナリーの魔術はまだつづく。

かれが「読めない本」と呼んでいる絵本の
類はムナリーをもっとも有名にしているもの
だろう。前記の「暗い夜に」などは黒いラシ
ヤ紙、パラフィン紙、灰色の包装紙などをお
もしろく生かして、穴をあけたり、むしった
りして（勿論むしったような不定形な穴を機
械で切るのが、幻想的な空間を「本」の
なかにつくりだしている。暗い夜の猫の冒
険、遠い夜空に光る小さな黄色の光、梯子を
かけてそれを探険に出かけようとする人間ど
もの大失敗、黒い紙の最後の頁をめくると黄
色の光は一匹の螢である。パラフィン紙の数
頁は草原の虫たちの世界だ。こんどは洞穴に
入ってゆく。原始人の狩りの壁画がある（頁
夏）。昔の海賊の遺物である宝物の箱があっ
て、あけてみると魚の骨がある。石器時代人
の遺物。おそろしい巨大な原始動物の化石。
やつと外へ出ると空には星がいつぱい。その
黒い紙をめくると黄色のツヤ紙……
ムナリーはこうした絵本を他に二、三冊見
せてくれて、差上げたいが限定版でいまは手
に入らないという。そして「暗い夜に」だけ
を頂戴した。しかし原弘氏が最近の旅行で珍
しく入手された「機械」をここで拝借する
ことにする。この「機械」はそれこそ荒唐無
稽の「風が吹けば桶屋が儲かる」以上の論理
と物理学による発明集である。たとえば「羽
ばたき式ベンチレーター」と称する機械は日
まわりの花に結んだレンズが太陽光線によっ
て蛙の背を焼くと、熱いのでびよんと、腕の
中へ飛びこむ。その重みでお腕は浴槽の水
中へ飛びこむ（お腕には穴があけてあるので蛙
は無事水中へ）と同時に滑車がまわって枝の
ブランデーの瓶が傾く、すると水槽に酒がこ
ぼれる。酔払った鰯がさかんに尻尾を振る

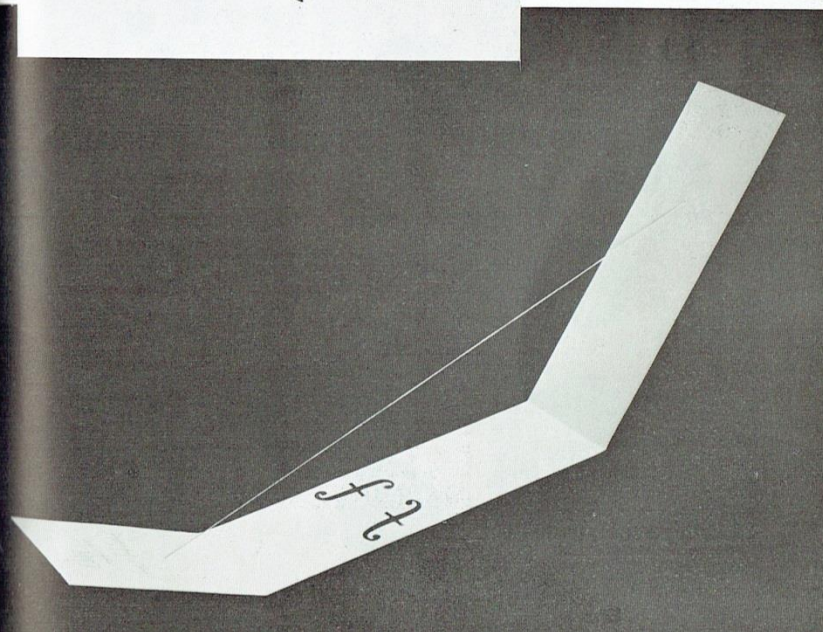


上・魚のモビール(紙)

下・展覧会の案内状



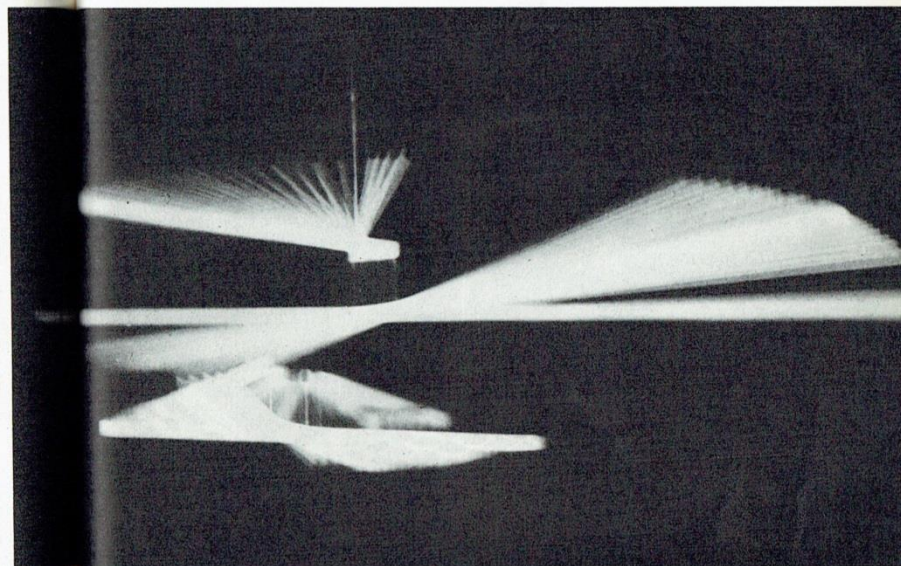
上下ともクリスマス・カード。上は一枚の厚紙(紙の両面はあざやかな緑と赤)に、切りこみを入れて折ったもの。下はやはり一枚の厚紙を折り、糸を渡して楽器を模したもの。



右・靴のポスター（コリア・ピエリ社）



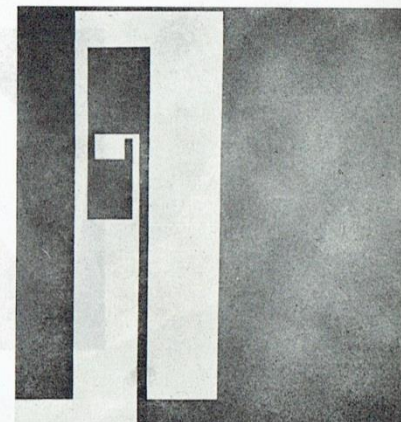
上・魔法瓶 1955年度「コンパッ・ドーロ」賞



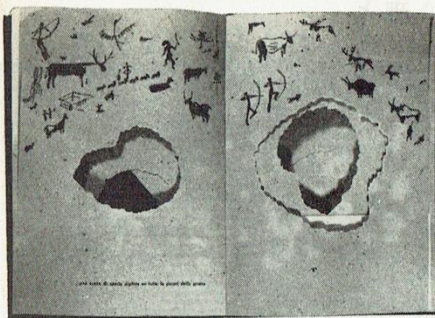
上・モビール 動く無用の機械（木とナイロン）



上・ゴム人形の玩具「ジー」(ビゴニマ S.r.l. 会社) 1954年度「コンパッ・ドーロ」賞



下・絵画 1951（レア リテ・ヌヴェル展出品）



読めない本「暗い夜に」より

「私は彫刻もつくりません」といつて見せてくれたのは、紙と細い木の棒で出来た紙風のような抽象彫刻、それはたまたむと平たくなってしまう。そして軽い。それを軽金属板でもつくっている。私は折りたたみ式彫刻といったが、ムナリーは「旅行用彫刻」といった。部屋の壁に数点のタブローがかかっていたので「あなたの絵ですか」ときくと「私の抽象絵画です」とちょっと皮肉とおどけた調子とを半々に交えて答える。「そしてこれはみんな同じものです」という意味が私にはすぐのみこめなかったが、かれはすこしむずかしい理論をのべはじめた。支那の陰陽の象徴である（●）（○）を描いてみせて、つまりこれはネガティブ・ポジティブの関係で二つの形と二つのタブローができていくが（それが色彩の関係によって二つ以上になるが）、もとはひとつだということである。しかも普通のタブローのように、ひとつの背景（フォン）あるいはバックに描かれたものでなくて、実は背景のない絵だ、ということになるらしい。この相対性の論理は形而上学めいてきたが、かれが東洋の陰陽まで引きだしてきたのは意外であった。ムナリーはこのような絵をバリの

レアリテ・ヌヴェルに出品したこともあり、ミラノの「具体芸術運動」MACCのメンバーでもある。ムナリーは日本の紙製ののぼりや水引きなど出して見せ、ニューヨークで買ったもののだといった。そしてヤナギ（宗理氏）の名をなつかしそうにあげた。それから辛い酒、甘い酒、ソーダ、ジュースなど色とりどりの瓶をお盆のせて「さあどれでも」と親切にいつてくれる。そのもてなしぶりまでがムナリー式である。婦りがけに出口の廊下のような部屋でかれの絵のコレクションを見せて貰う。未来派のバルラ、カンディンスキー、マニエリ、キリコなどや、無名の新人マリなど、みな小品だが五十点以上もあったろうか。さようなら、ムナリーさん！私は道を教えて貰い、人っ子一人いない淋しい深夜の停留所から市電に乗った。私はかれがくれた資料の包みをサンタクロースのお土産よろしく抱いていたが、その表を見て、ブルノ・ムナリーと家庭」と書いてあるのに気がついた。JOY MAKER! こんな妙な英語を私は口ずさんだものである。（美術評論家）

絵本〈機械〉より

右は表紙

下はその一図〈羽ばたきベンチレーター〉

